

2022年1月23日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書3章7～12節

説教題：主を知ること

今や大企業になったアメリカ・アップル社の創業者スティーブ・ジョブズ氏は56歳で亡くなりましたが、彼がスタンフォード大学で行った有名なスピーチがあります。その中で、彼は自分の生涯も振り返って「ハングリーであれ、愚か者であれ」と言いました。3年前の「信徒大会」に来て下さった横山幹雄先生は、「それを次のように聞いた」とご自分の本に書いておられます。「主を知ること」に常にハングリーであれ！主を知らしめることに常に愚か者であれ！。「愚か者であれ」というのは「愚か者のようになって一心に…」ということでしょう。横山先生は、こんなことも言っておられます。「高齢になった今、『あなたは年を重ね、老人になったが、まだ占領すべき地がたくさん残っている』(ヨシヤ 13:1)という御言葉を聞いている…主を知ること、主に似ること、主を伝えること、3つの占領すべき地を神様に示されている」。今日のメッセージを準備していて、この言葉を思い出しました。と言うか、この言葉の回りにメッセージが出来たような感じです。「内容」と「適用」と2つに分けてお話しします。

1. 内容：主の救いとは

イエス様は、安息日に会堂で片手の萎えた人を癒されました。そのことによって指導者達は、イエスを殺そうと相談を始めます。「十字架」に向かう動きが始まったのです。イエス様は、その敵意を避けるようにガリラヤ湖畔に移動されました。しかし群集は押し寄せて来ます。「エルサレムから、イドマヤから、ヨルダンの川向こうやツロ、シドンあたりから、大ぜいの人々が…やって来た」(8)とあります。ガリラヤの周りの広範な地域から人々が押し寄せて来たのです。ある意味でこの箇所は「イエス様の伝道状況」を報告する箇所です。そして「伝道」という観点で言えば、ここには理想的な状況が起こっています。人々が押し寄せて来ています。しかしイエス様は、癒しを求めて押し寄せて来た人々を片っ端から癒す、ということをしておられません。弟子達に小船を用意させて、人々と距離を置かれるのです。なぜでしょうか。

9節「イエスは、大ぜいの人なので、押し寄せて来ないよう…」(9)を、「新共同訳」は「…群衆に押しつぶされたいためである」(9)と訳しています。なぜ、イエス様が群衆に押しつぶされそうになられたのか。それは、群衆を突っぱねることをされなかったからです。イエス様は、人々を受け入れられたのです。前回、イエスは手の萎えた人を指して「ここに…大切にされるべき人がいる」と言われました。イエス様は、1人の魂を大切にしながら関わって行かれました。だから人々が押し寄せて来るのです。ではなぜ、距離を置かれたのか、皆を癒してしまわれなかったのでしょうか。

病に悩む人々の願いは切実です。私も軽微なものでしたが、昨年、病を経験しました。病に苦しむ、それは他に比べるものがない程に重大なことでしょう。だから私達は祈ります。その方が癒されるように、少しでも痛みが和らぎ、少しでも苦しみから解放されるように、祈ります。「祈りによって何らかの奇跡的な癒しの業を経験する確立は5%だ」と言った神学者がいます。5%もあるのです。いずれにしても、どんな病の癒しのためにも祈るべきです。また神様は、人類に医学という恵みを与えて下さっています。それが最善に機能するように祈るべきです。そして癒されることは素晴らしいことです。しかし「では祈れば必ず癒されるか」というと、そうではありません。そしてイエス様は、「集まった人々を片っ端から癒す」ということをされなかったのです。初代教会においても「奇跡的な癒し」はありました。しかし教会は、「癒しを前面に出して人を獲得する」ということをしなかったのです。なぜでしょうか。

ある時、インターネットの動画である作家がこう言っていました。「最近思うのだけど、人はみんな死ぬね。僕の知っている友人が次々に死んで行くんだ…」。「この人はどんな話をするのだろうか」

と興味を持って聞いたのです。しかし結論は、「だから生きている毎日を大切に、やり残しのないようにして世を去りたい」ということでした。「諦めの宣言だ」と思いました。しかし実際、死に対して、人間は無力です。病が癒されたら素晴らしい。しかし、人はいつか死ぬのです。最近、「臨死体験」ということが真面目に研究されています。死んだ人の魂が肉体を離れて行ってベッドに横たわっている自分の遺体を見下ろすのです。しかし次の瞬間、何かの理由で魂が体に引き戻され、息を吹き返すのです。沢山の事例があります。つまり、人は死にますが、「死んだら終わり」ではない、死を超えた世界があるのです。私達の魂は、そこに向かっているのです。

11 節に「汚れた霊どもが…叫んだ」(11)とあります。この悪霊はどこから出て来たのでしょうか。これは明らかに「イエスの許に来たある人々に悪霊が取り付いていた」という書き方です。人々はイエスを求めて押し寄せて来ましたが、しかしその中には、神の虜ではなく悪霊の虜になっている人々がいたのです。もちろん、そうでない人々もいたでしょう。しかし、イエス様を取り巻いた「群衆」はどうなって行くのか。指導者が実際にイエス様を十字架につけることができるのは、しばらく後、「群衆はますます激しく『十字架につける』と叫び立てた」(マルコ 15:14)、この状況が生まれた時です。その意味で「イエスの十字架」に許可を与えるのは「群衆」なのです。病を癒された人も、癒されなかった人も含む「群衆」です。

「体が癒された、しかし魂は悪霊に憑かれている」としたら、あるいは、神の子を十字架に架けるように叫ぶ、そのようなものを持っているとしたら、その人は、どのようにして「永遠」を迎えるのでしょうか。イエス様のことを「癒しをする人」として捉えて、「癒し」を経験して、しかしそれで終わったら、魂が永遠に向かって救われなければ、何もならないのです。ある方は、教会の祈りによって癌が消えました。素晴らしいことです。しかしその方は、やがて信仰から離れて行かれたのです。「体が癒されること」と「魂が救われること」は、別のことなのです。

イエス様が何より願われたのは、人々がご自分のメッセージを受け入れ、悔い改め、神様と和解し、神様との祝福の関係に入ることです。神との関係に入った人が、「永遠の救い」を得ることが出来るように、イエスは十字架に架かって下さったのです。そして、「永遠の救い、永遠の命」を保証するために死から甦って下さったのです。神との関係、そこから神の恵みは、様々に広がって行くのです。イエスは、神との祝福の関係、「永遠の救い」をこそ与えようとされたのです。それをこそ人々に願われたのです。

こんな話があります。ロジャーさんという一家にジミーという 7 歳の男の子がいました。彼は家族にこんな話をしました。「あのね、僕達みんな、いつか天国の門の所に行くでしょう。そうしたら、でっかい天使が出てきて、持っている本を開いて、天国に入る人みんなの名前を呼ぶの。うちの家族のところに来て、お父さんから順番に呼んで言って、最後に『ジミー・ロジャースはいますか?』って、僕の名前を呼ぶんだ。僕が小さすぎて天使に見えないといけないから、僕、ジャンプして、すごく大きな声で天使に分かるように『ハーイ』って言うんだ」。その数日後、ジミーは大事故に巻き込まれてしまいました。病院に家族全員が駆けつけた時、ジミーの体は動かず、意識も戻りません。ジミーの命は、翌朝まで持ちそうもありませんでした。家族は祈りながら片時も傍を離れませんでした。真夜中近く、ジミーにほんの少し意識が戻ったような気配が感じられました。その時、ジミーの唇が動きました。ジミーは家族全員がそれと聞き取れるほどはっきりした声でこういったのです。「ハーイ」。この家族は慰められ、生きる希望、将来の希望を与えられました。「永遠の命」の希望は、生きる現実に対して無力ではありません。世が与えることが出来ない希望で「私達の生涯」を照らすのです。依然として死はやって来ます。しかし、ホスピスの現場で良い働きをしておられる下稲葉康之という先生は、こう言っておられます。「神の奇跡は現代社会のどこに見られるのかと問われるならば、私は躊躇なく答える。それは…絶望的な状況にある末期癌患者に生き生きとした望みを与える神の働きにあると。まことに神の力は弱さのうちに現される」(下稲葉康之)。神と

の関係にあるならば、死の淵でも、なお神の働きを経験するのです。

だからこそイエスは—(繰り返しますが)—その「救い」をこそ与えようとされたのであり、それこそ教会が、何よりも世と分かち合って行けることです。私達には、癒しは出来ないかも知れない。しかし、福音を伝えることは出来ます。ペテロは言いました。「あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです」(1 ペテロ 2:9)。私達は「自分が救われて終わり」ではない。救われた者に、神が期待しておられる大切な使命があるのです。

2. 適用：主を伝えるために主を知る

その意味でこの箇所は、私達にチャレンジを与えます。ここで「汚れた霊どもが…『あなたこそ神の子です』と叫」(11)んでいます。超自然の存在が叫んでいるわけですから、こんなに強力な「証し」はありません。しかしイエス様は、悪霊に「ご自身のことを知らせないようにと、きびしく彼らを戒められた」(12)のです。なぜイエスは悪霊の「信仰告白」を封じてしまわれたのでしょうか。ある神学者がこう言いました。「たとえ私達がどんなに正しい告白をしたとしても、イエスの道に従い行くまでは、イエス・キリストを我々は知らない」。「汚れた霊」は、イエス様を「神の子」だと告白しました。しかし彼らは、イエス様を信頼し、イエス様に従おうとしていたわけではありません。悪霊としての知識でイエス様のことを知っていたかも知れませんが、本当の意味でイエス様を知らないのです。だからその告白は、人々に正しくイエス様を紹介するものでないのです。だからイエス様は、その口を封じられたのです。

しかし一方で、イエス様は「群衆に押しつぶされないため」に超自然的な方法を用いられたのでなく、弟子達に助けを求めて「小舟を用意して欲しい」と言われたのです。「この押し寄せて来る群衆を、私と一緒に受け止めて対処して欲しい」と言われたのです。今、人々は教会に押し寄せては来ません。しかし、神を必要としている人は沢山いらっしゃると思うのです。いや「救い」を必要としない人はいないのです。人は皆、何かの悩みを抱えて、問題を抱えて、生きているのではないのでしょうか。その人々に、いや 1 人びとりに、関わって行くために、イエス様は「小さな舟」であるこの教会にも、私達にも「私を運んで欲しい」と言われるのです。だからこそ私達は、その働きが良く出来るように、イエス様をより良く知りたいのです。イエス様を正しく紹介したいのです。またある神学者は言いました。「我々が、主に似る者となる程度に従って、差し出される人間の必要に応じて行くことになるだろう」。いずれにしても、私達がイエス様を知り、少しでもイエス様に似た者になることは、大切なことなのです。

カーラ・タッカーという人の話があります。彼女は、友人と共謀して予てから恨みを抱いていた男性を殺してしまうのです。ところが刑務所の中で劇的な回心を経験するのです。そのあまりの変化に、やがて彼女を逮捕した刑事や、果ては殺された男性のお姉さんまでが、彼女が死刑にならないように助命嘆願をするようになるのです。結果的には死刑が執行されたのですが、「何が彼女を変えたのか、何が彼女の人間性をあれほど見事に回復させたのか」ということが人々の心に残ったのです。それは一言で言うと「イエス様の赦し」だったのです。恐らく彼女もある時、自分の犯してしまった罪の大きさ、その罪責感に耐えられないような思いになったのだと思うのです。そんな中で彼女は、聖書を通して「自分の罪のために苦しんでくれた人がいる」、「私が神に赦されるために死んでくれた人がいる」、そのことを真実として受け止めて行ったのではないかと思うのです。自分の罪に苦しめば苦しむほど、十字架を通して差し出されている「赦し」の有り難さは途方もないものだと思うのです。それが彼女の心を溶かして行ったのだと思うのです。しかし私は、彼女が聖書を読んだだけでなく、彼女にイエス様の赦しを伝え、イエス様の香りを放って導いてくれた誰かがい

たのだと思うのです。繰り返しますが、その意味で、私達が主を知り、少しでも主に似ること、信仰者として成長することは大切なことなのです。

確かに、私にはこんな経験もあります。カナダで、鬱病で入院する直前、高校生に向けてメッセージをしたことがあります。自分が崩れていますから恵みに溢れて語るような状態ではありませんでしたが、その説教で高校生たちが心を開いてくれたのです。1人の兄弟が言ってくれました。「とても聖霊に満たされているようには見えなかったけど、そのメッセージを神は用いられたのですね」。中国の伝道者が言ったそうです。「伝道とは、神がキリスト者を用いて働かれることだ」。私達の状況の云々を超えて、用いられるのは神様なのです。主権者は神です。私達には懸かっていない。

しかし、そうであれば、それに力を得て、私達の方でも少しでも用いられやすい器、イエス様の憐れみ、力、それを分かち合えるように、イエス様のことを良く知ることが大切だと思うのです。礼拝は正に主を知る場ですが、礼拝だけでなく、普段に聖書に親しみ、御言葉に従い、祈りを捧げ、主の真実を、主を、知ることが大切ではないでしょうか。神様が私達を用いて驚くような御業をなして下さるかも知れません。先日もお話しましたが、ある場所である姉妹に2～3年ぶりにお会いしました。その姉妹は、すぐにご自分の証しを下さり、「この神様は本物ですよ。祈りには力がありますよね」と確信を持って言われました。私は、その方の信仰に鼓舞されるものを感じました。その方は以前、こう言われました。「教会に導かれてから娘の運命も変えられました。家族の運命も変えられました。キリスト教に出会っていなければ、今頃、娘はどうなっていたのか、家族はどうなっていたのか、それを思うと、神様に感謝しています。本当に神は運命さえも変えることがお出来る素晴らしい方です」。このような喜びを語る方が、私達の周りに起こされるかも知れません。

その意味で、この適用のまとめとして、初めにご紹介した横山先生の言葉を思うのです。「高齢になった今、『あなたは年を重ね、老人になったが、まだ占領すべき地がたくさん残っている』(ヨシュア 13:1)という御言葉を聞いている…主を知ること、主に似ること、主を伝えること、3つの占領すべき地を神様に示されている」。これは、ご高齢の方ばかりでなく、私達皆に、この個所が語っているチャレンジではないでしょうか。